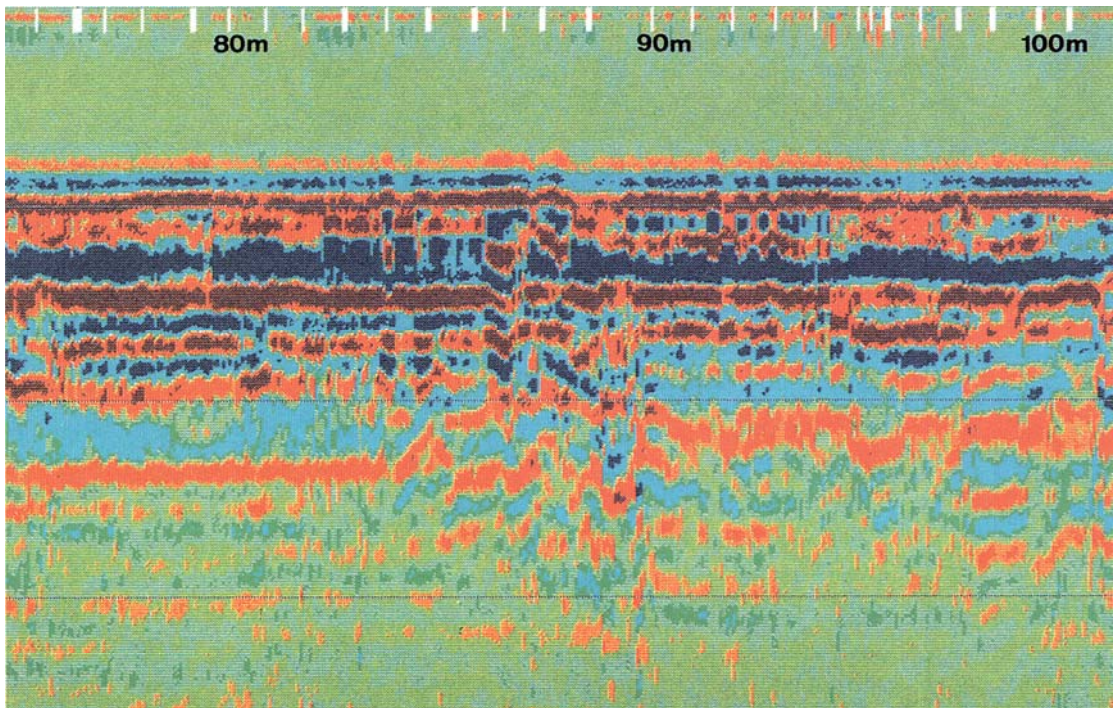


京都大学埋蔵文化財ニュース 1

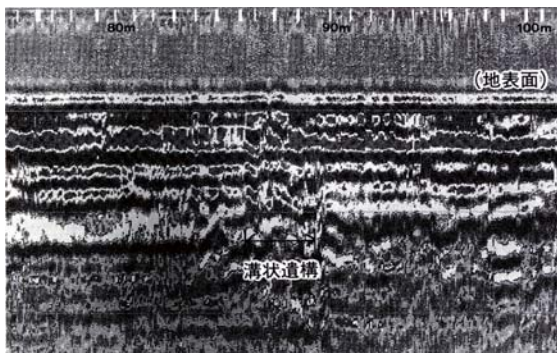
1991.11.20

京都大学埋蔵文化財研究センター

〒606 京都市左京区吉田本町 TEL.075-753-7691



教養部構内の地中レーダー探査記録



地中レーダーは、電磁波の反射状況から、地下の遺跡の状態を把握するもので、教養部構内で平安時代後期の条坊の道路にともなう溝と思われる落ち込みを検出した。

埋蔵文化財と地中レーダー探査

発掘調査の方針を検討するためには、遺跡の埋積状況を、あらかじめ把握する必要がある。このため、地表に露出している遺物を集めたり、文献や古図の検討、試掘調査などをおこなう。さらに、物理的な方法により地面を掘り下げることなく地中の状況を探査することがある。

今回は、教養部構内においてテニスコートとして利用されている地区を、地中レーダーを用いて探査し、今後の発掘調査およびキャンパスの建築計画の策定に必要な埋蔵文化財に関する情報の収集を試みた。

1 地中レーダー探査の方法

地中レーダー探査とは、地表から地中に向けて電磁波を放射し、その反射波をとらえることによって、地下の遺構や遺物などを探査する方法である（図1・2）。踏みしめられた旧地表面や、土坑・溝などの地層の凹凸、礎石などを反射波の変化によって把握することができる。

2 調査の概要

調査地は、京都大学教養部構内の南部に位置する（図3）。教養部構内では、これまでにおこなった発掘調査で、弥生時代から平安・鎌倉時

代にかけての遺構が数多く見つかっている。とくに、今回の調査の対象となった地区は、九躰阿弥陀堂のあった平安時代後期の福勝院が比定されている所でもあり、また、当時、白川に施されていた条坊地割の中心街路今朱雀が通っていたと推定されている所でもある。したがって、この地区の地中には、建造物の基礎や、道路の側溝などの遺構が残っている可能性があり、その分布状況を調査した。

探査は、応用地質株式会社に委託し、東西約110m、南北40mの範囲に、5m間隔の測線を設定しておこない、反射異常の集中した東部ではさらに細かく探査した。

3 探査の結果

探査によって判明した地盤の状況は、全般的には単調なものであったが、一部に以下のような特徴的な反射を示す所があった。

〔部分的な異常反射〕 周囲の地中レーダー測線では反応がないが、部分的に強い反射が孤立的に認められる部分があり、あまり大きくない埋蔵物の存在を示すものと考えられる（図3●印）。



図1 地中レーダーによる探査

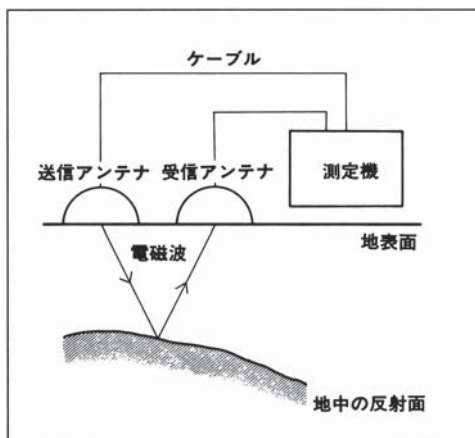


図2 地中レーダー探査の原理

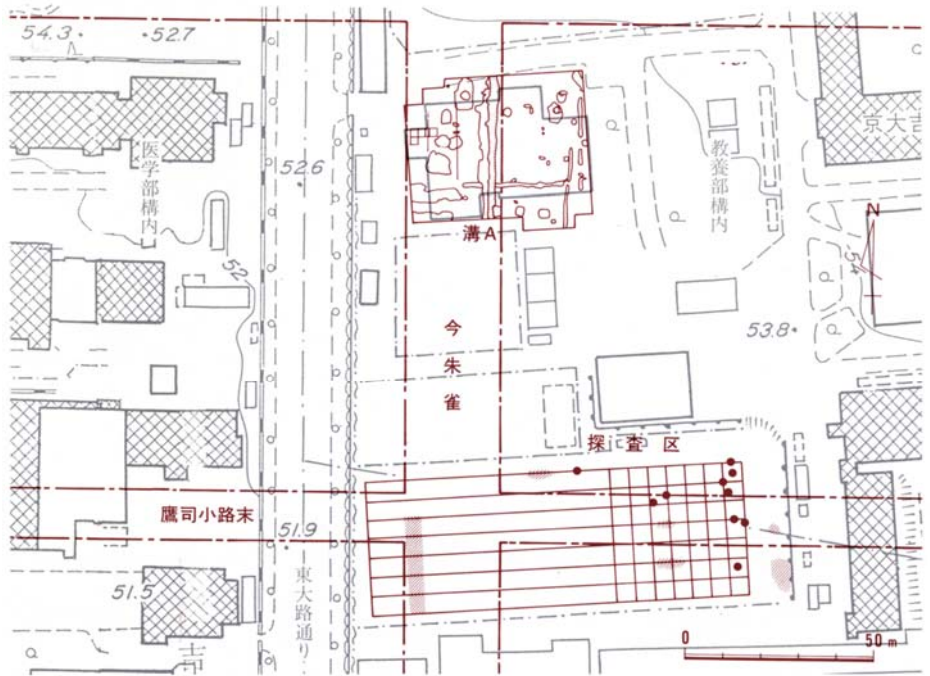


図3 調査地点と
白河の条坊地割
縮尺 1/2000

〔広がりをもつ異常反射〕 反射の縞模様が広い範囲にわたって不規則に乱れたり、船底状に落ち込む反射パターンが続く部分（表紙写真，図3斜線部分）。このような反射パターンが，複数の測線で連続して検出される場合には堀や溝などの，部分的に検出される場合は土坑などの可能性が高い。

4 調査結果の検討

検出された部分的な異常反射の並び方はやや不規則であり，礎石列のような規則的な構造物に対応するものと断言することはできないが，反射をとらえた地点は調査域の東側に集中する傾向があり，この区域に複数の種類の遺構が存在する可能性がある。

また，調査域の西側には，ほぼ南北に連続する広がりをもつ異常反射が確認できた。この反射範囲が直線的に連続することから溝跡などの遺構によるものと考えられる。この溝に対応するものとして，平安時代後期の南北道路今朱雀の西側の側溝があげられる。

5 今朱雀の遺構

平安時代後期に，現在の京都市左京区吉田と岡崎一带には，平安京内と同様の条坊地割が施された。今朱雀はその中心となる道路で，この今朱雀に関連する遺構としては，今回の探査区の北約250mの吉田食堂建設予定地で発掘した溝Aがある（図3）。この溝Aは，幅2m，深さ1.2mの溝で，13～14世紀の遺物が出土した。このほか，南約200mの東大路近衛の府営住宅の建設予定地で検出した溝や，岡崎の尊勝寺の西築地跡の遺構などが一直線上にならぶことから，これらの遺構が今朱雀の東端にあたると思われる。今回，検出した溝状の落ち込みは，その方位が真北からわずかに東に振ることや，その位置が今朱雀の幅に一致することから，今朱雀の西側側溝にあたる可能性がある。

以上のような結果から，発掘調査に先立って地中レーダー探査をおこなうことは，調査方針の検討に必要なデータの収集に有効な方法となるだろう。（浜崎一志）

弥生時代の銅鏃

1980年に本部構内の電気工学研究室の建物の建設にともなう調査で出土した銅鏃、青铜製の矢尻である。遺構からの出土品ではないが、形からみて弥生時代の後期に作られたものと思われる。

先端など欠けた部分があるが、長さは4.5cmを超える、銅鏃としては大型のものである。裾が大きく広がり、後部には矢竹に取り付けるための突起（茎）が付いている。中央に直径5mmの穴が鑄造後に両側からあけられている点は大きな特徴である。一方の穴の脇には、場所を間違えたため途中までしかあいていない穴がある。

この銅鏃の興味深い点は、全体に強く研磨が加えられている点である。砥石の筋が両面に残る。刃をつけるための中央の稜や茎など突出した部分がほぼ平らになってしまっており、全体が丸みを帯びるようになっている。

金属が貴重品であった弥生時代には鏡の破片などを研磨して、ペンダントに再加工すること

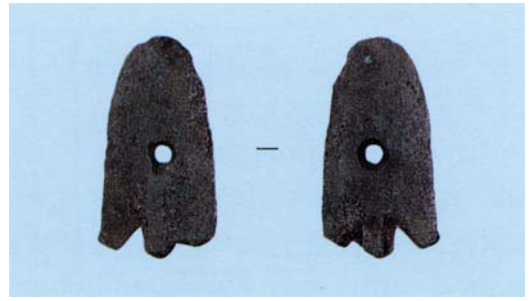


図4 本部構内出土の銅鏃 縮尺3/4

が盛んであった。この銅鏃も、穴の部分に紐を通し、ペンダントとして用いるように再加工された可能性が高い。

近畿地方の弥生時代の遺跡からは多くの銅鏃が出土しているが、このように大型で裾が開き、中央に一つ穴がある、といった特徴をもつ銅鏃は、むしろ愛知県東部や静岡県西部から多く出土している。この地域には同時期に特徴的な銅鐸が分布することも知られており、独自の青铜器生産をおこなっていた可能性がある。この銅鏃もそれらと同じく東海地方で製作されたものと思われる。そのように遠隔の地からはるばるもたらされたとすれば、その理由はペンダントとしての価値にあったのだろう。（森下章司）

